

2021年2月21日 佐土原教会礼拝説教
聖書箇所：ヨハネ福音書 15章 18～25節
説教題：僕は主人にまさらず

7年前になりますが、大分の国東半島に「ペトロ岐部」という人の銅像を見に行きました。ペトロ岐部は、徳川幕府のキリスト教弾圧が厳しくなる頃、ローマに行き、司祭に叙された後、「ローマに留まりなさい」という勧めを聞かず、迫害の嵐が吹き荒れる日本に帰って来ました。各地に潜んでいる切支丹達を励ましながら九州から東北まで行き、ついに仙台で捕縛されます。彼を待っていたのは穴釣りの拷問です。でも彼は同じ拷問に苦しむ仲間達を「天国が見えているぞ。もう少しの我慢だ。ほらイエス様が苦しみを半分担って下さっているじゃないか」と励まし続けました。あまりに励ますものだから、役人が穴から引きずり出して、拷問を行いました。でも最後まで棄教しない。彼を取り調べた幕府の役人は書き残しました。「ペトロ岐部、転び申さず候（ペトロ岐部は最後まで決して信仰を捨てなかった）。役人がペトロ岐部の信仰の姿に心打たれた言葉だと思います。私達の先達の信仰に心打たれることです。

イエス様の長い告別説教が続きます。ここでイエス様は、やがてキリスト者が受けるであろう迫害の予告をしておられます。しかし、キリスト者が憎まれる前に、まずイエス様が憎まれたのです。なぜ世はイエス様を憎んだのでしょうか。イエス様に憎しみを向けたのは、主に宗教指導者でした。イエス様の教え、行動が、指導者達のそれと違っていたからです。指導者達は「安息日には仕事もするな」と言って、してはいけない仕事のリストまで作って人々を縛りました。病人も癒されてはならなかったのです。ところがイエス様は、安息日に病人を癒し、苦しみから救われました。そのことが指導者達は、我慢ならなかったのです。あるいは彼らは、自分達の判断基準より下にいる人達を「罪人」と呼んで、接触しないようにしました。しかしイエス様は、「罪人」と呼ばれる人々に近づき、その人達を神に導き、救われたのです。指導者は、そんな宗教家がいることが赦せないのです。イエスが天の神様を「お父さん」と呼んでおられたことも、指導者にしてみれば「神への冒瀆」でした。イエス様は、神の真理を語られ、神の愛の業を為して行かれました。24節にあるように、ユダヤ人達は、そのイエス様の業を見た、神様の業を見たのです。しかしそれは、指導者達が造り出した信仰の形とは違ったのです。それで憎まれたのです。

弟子達の時代、彼らは、ユダヤ教、あるいはローマの宗教が支配する社会でイエス様を神として生きました。ローマ帝国に住む者は、年に一度、皇帝を神として拝み、ローマに忠誠を誓わなければなりません。クリスチャン達は、それをしませんでした。それで「不信仰な者達、不忠実な者達、危険な者達」として憎まれました。どんなに善良な生活をしていても、他の人と違うことをすれば、受け入れられないのです。日本でも、歴史の中でキリスト者は憎まれました。ペトロ岐部もそうです。数年前に評判になった「沈黙」の映画の中でも、キリスト者が憎まれる様子が描き出されていました。また70年前の戦中も、ある牧師達は牢に入れられ、解散させられた教会もあるのです。

私達はどうか。信仰を持っているからといって「憎まれている」と感じることは、あまりないかも知れません。しかし世は、世間一般と違うもの、異質なものを疎ましく思う傾向を依然として持っているのではないのでしょうか。そして私達も、ある意味で回りと違うので

す。それは、私達が信仰を拠り所として生きているということです。多くの人が神を認めない世にあって、私達は神様の支配を信じ、聖書の言葉を喜び、聖霊の働きを期待して、希望を持って歩いています。死は終わりではなく、死の向こうに天国があると信じて生きています。私達を生かしているこれらの土台のところは、私達が意識しようがしまいが、外へ出て来るのです。その意味で、私達も、世から疎まれる条件に当てはまるかも知れません。しかし、それはある意味で、私達の置かれている恵みの立場をはっきりさせることでもあるのです。イエス様は言われました。「あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです」(19)。私達が世の在り方と違う在り方で生きているとしたら、それは私達がイエス様によって世から選び出された証拠だし、聖書が「私たちの国籍は天にあります」(ピリピ 3:20)と言うように、私達が天の御国に属している証拠なのです。イエスは言われました。「しもべはその主人にまさるものではない」(20)。イエス様が憎まれたのなら、私達が世から疎まれることがあっても不思議ではないということです。そのことをイエス様は、予め弟子達に語られたのです。

では、世がそういうものだとして、私達は、世に在って、どのように生きて行ったら良いのでしょうか。3つのことがあると思います。

1つは、自分の罪を認めて生きるということです。イエス様は22節で「もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。しかし今では、その罪について弁解の余地はありません」(22)と言われました。彼らの罪とは、イエス様、神様に対する不信仰でしょうが、しかし彼らは、自分達のことを不信仰だとは思っていません。9章41節に「もし、あなた方が盲目であったなら、あなたがたには罪はなかったでしょう。しかし、あなた方は今『わたしたちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです」という言葉があります。彼らは、自分達のことを熱心な信仰者だと思っているのです。実際、ある意味で熱心でした。しかし、いつの間にか、天に代わって人に石を投げるような信仰になっていたのです。それがイエスの言われた「あなたがたは『自分が見える』と言っている」と言うことです。しかし結果として、「見える」と言っていた彼らが見えなかったのが、自分の中にある罪だったのです。自分も、神に罪を覆われ、神に導いて頂かなければならない存在であることを忘れてしまっていた、そして神の御心から一番遠い所に立ってしまったのです。自分が絶対になってしまって、神の許から神のメッセージを持って来られた方を見ても、その方のどんなに素晴らしい業を見ても、「自分の方が正しい」として、その方を退けてしまったのです。

私達へのレッスンは、私達も、神に罪を赦され、神に導いて頂かなければならない存在であることをしっかりと覚えるということです。彼らも、身を低くして聞く耳を持つことができれば、救いは目の前にあったのです。しかし、彼らはイエス様を無視しました。しかし私達も、神を信じている、でも神様に聞こうとしない、イエス様の言うことに真剣に耳を傾けない、そういうことがあるのではないのでしょうか。この「しもべはその主人にまさるものではない」(20)という言葉は、重い言葉だと思います。私達の主は、私達のために十字架に架かれた主です。私達は、十字架のゆえに、神の恵みに与り、永遠の命に与っているのです。しかし、神様を隅に追いやって、自我で行こうとする、思い通りにならないと神様を恨む、そういうことがあるのではないのでしょうか。イエス様は、その私の罪のために十字架に架かって下さいました。そ

のイエス様の十字架に生かされて在る、ということを感じる時、祈りを忘れることはなくなる、赦しを、導きを求めることを忘れることはなくなるのではないのでしょうか。私達は、彼らのように心を頑なにしてはならないと思います。

2 つ目は、愛に生きることです。イエスは「あなた方は、憎まれたら憎み返せ」とは言われなかったのです。「もし、世があなたを憎むことがあっても—『しもべはその主人にまさるものではない』(20)—私が生きて見せたように生きなさい」と言われたのです。イエス様は、神様の使命を持って世にお出で下さいました。聖書は宣言します。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ 3:16)。神が世を愛された、イエス様はその愛を生きられたのです。だから、イエス様に敵対する人々にも救いの道を説かれたのです。最後は、ご自分を十字架に架ける人々のために神の赦しを執り成されたのです。遠藤周作が言っています。「自分達の卑怯な裏切りに怒りや恨みを持たず、逆に愛を持ってそれに応えることは人間のできることでなかった。少なくとも弟子達は…今日までの人生のなかで、そのような人を見たことはない…ユダヤの歴史に…もそのような人は一度も出現しなかった。その驚きは弟子達には激しかった」(遠藤周作)。その愛が弟子達を変え、人々を変えて行く力となって行くのです。イエス様はこの一連の説教の中でも「愛に生きなさい」と繰り返し語られました。「山上の説教」では「敵さえ愛する愛に生きなさい」と言われました。結局、キリスト者の生き方とは、愛に生きることではないのでしょうか。ある方が言われました。「私は神に愛された。その愛された愛で誰かを愛し返す、それが私の信仰です」。教えられます。

ある姉妹は、父親の暴力に耐えきれなくて母親と家を出たのです。彼女は父親を憎んでいました。やがて母親が死にます。彼女は入院中の父親に母親が死んだことを知らせに行きます。父親は「俺が生きているのはお前への復讐の一念だ」と言います。彼女も「お母さんが死んだのはお父さんのせいよ、どうしてくれるの」と言いたかったのです。でも口をついて出た言葉は「お父さんを放っておいてごめんなさい。赦してね」という、言った本人が一番驚くような言葉だったのです。父親の怒りは消え、もう何も言えなくなるのです。憎しみに、憎しみをぶつけても何も変わりません。キリスト教会がローマ世界で人々に認められ、広がって行く、その理由の1つは、教会の愛の生き方だったと言われます。愛に生きること、それが、イエス様を主と仰ぐ生き方なのだろうと思います。

3 つ目は、証しに生きることです。キリスト者は憎まれました。しかし、キリスト者を憎むローマ帝国の中で、教会は広がって行ったのです。そして、やがてコンスタンチヌスという皇帝がキリスト教を公認するのです。教会を無視しては、敵対しては、帝国を治めることが出来ないくらい、教会は成長して行ったのです。凄いことです。なぜ、そんなに成長したのか。もちろん神のご計画でしょうが、しかし具体的には、クリスチャン達がイエス様のことを宣べ伝えて行ったからです。彼らは命がけで「ここにしか救いはない」と宣べ伝えたのです。そして、イエス様を信じる信仰に力があつたから、本物だったから、彼らの証しは広がって行ったのです。明治初年、長崎の浦上から島根の津和野に流された切支丹達の中に5歳の女の子がいました。女の子を何とか棄教させようとした役人が、お菓子を見せて「『キリシトは嫌いだ』と一言言いなさい。後はおじさんが全部世話して上げるから」と言いました。しかし女の子は「ゼ

ズ様を汚す言葉を言うことなんかは出来ない。天国にはもっと素晴らしいお菓子がたくさんあるから」と答えて死んで行きました。しかし、その返事を聞いた役人がやがてクリスチャンになり、牧師になったのです。5歳の女の子の信仰が、人を変えたのです。日本でも起こったこんなことが、ローマ帝国内のあちこちでも起こったのではないのでしょうか。

私達も、その力ある、人を生かす真理である福音を委ねられています。良い話を知っていたら、人に聞かせたいと思うではありませんか。ある牧師がこう言っておられます。「証というものは特別な行いであってはならないのではないか。生活そのものでなくてはならない。苦しいと言ってはうめき、悲しいと言っては泣き、自分の弱さに何回もつまずきながらも、神に依りすがって生きて行く、それが私達の信仰生活である。それは、スマートなかつこいいことではない。いや、しばしば、はなはだかつこ悪いことである。それでいい。どんなにかつこ悪くつまずこうが叫ぼうが、その人間の支えられている土台というものは現れているのだと思う。どんなに弱点をさらして生きたってかまわない。その人間の根拠はかくしようがない」(小島誠志)。私達が神を信頼し、神を人生の土台に据えて生きて行くなら、その生き方が、神のご存在を証しするものになるのではないのでしょうか。そして私達が証しに生きようとするなら、私達の話聞いてくれる人がきっと備えられているはずです。そして神を信じる方、永遠の命をもらって天国に向かって歩む方が起こされた時、天国では歓声が上がるのです。そんな神様の働きに、置かれた場所で加わって行ければ、何と幸いなことでしょう。

終わりになりますが、先日、ある方から「家族に伝道をしたいけど、どうしたらよいか分からないのでとりあえず聖書を贈ることにしました。ついては何か御言葉を書いて下さい」というお電話を頂きました。「皆、心が固いのです」と言われましたが、その時、私はパウロのことが思われました。「新約聖書」の多くの書簡を書いたパウロ、しかし彼は、クリスチャンを憎み、教会を迫害していた人でした。しかしそのパウロが、やがてイエス様を宣べ伝える人になったのです。私は「神様はパウロさえ変えられた方ですから、希望を持って祈って行きましょう」と申し上げました。私達も、他の人に受け入れられない、時には憎まれることもあるかも知れませんが、しかし神様は、それにも勝って素晴らしいことを為さる方です。この神様に希望を置いて、前に向かって歩いて行きましょう。